

2019. 6. 30. 聖霊降臨節第4主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書2章41-52節

『神と人ともに愛される』

朗読された今日の聖書箇所はお読みになってわかるように、主イエス12歳のときの出来事、エピソードです。少年時代の主イエスのことを書き記しているのはルカ福音書のここだけです。他の福音書には少年時代の主イエスを伝える記事はなく、まことに貴重な聖書箇所と言えます。

『梅檀(せんだん)は双葉(ふたば)より芳(かんば)し』ということわざがあります。梅檀というのは初夏に咲く花で、白檀とも言うのですが、芽を出していくらもたたないうちによい香りを放つことから、立派になる人、後に大成する人は幼少のころから他の人とは違うすぐれたところがある、という意味です。

偉人伝などを見ると、子どものころから、こんなすぐれた面があった、というような話がよく出てくるものです。へえ、この人は小さい時からやっぱり抜きんでいたんだ、というような話です。実際それはそれでとても興味深いのですが、では、この福音書書いたルカは、梅檀は双葉より芳し、という思いでここを書きしるしたのか、というと、それは違うのです。ルカには少年時代の主イエスのこの出来事から、伝えたい、もっと別のことがあったのです。

ヨセフとマリアはユダヤの律法に忠実で、過ぎ越しの祭の際には、毎年エルサレムに旅をしました。ナザレからエルサレムまではおよそ100キロ。大人の足でも三日はかかる場所ですが、主イエスは幼い時から両親に連れられて祭のたびごとにエルサレムに旅していました。主イエス12歳の時も、同じように家族で上京しました。祭りの期間が終わり、帰路に就きました。当時は祭りに行く際、巡礼団のようなもの作り、多くの人たちが一緒に旅しました。ナザレやその周辺からエルサレムに向かう人は多かったでしょうし、イエスと両親もその巡礼団に加わり、連れ立って、一緒に旅したのです。主イエスがエルサレムに残っており、両親はそのことに気づかず一日分の道のりを行ってしまった、と言われるとなんと無責任な親なんだ、と思うかもしれませんが、両親は当然、一緒に旅する巡礼団の中にいると思っていたのでしょう。だがイエスがいないことに気づいたヨセフとマリアは親類や知人の間を捜し回ったのです。

が、見つけることができなかつた。両親はエルサレムに引き返しながら、捜し続けます。しかし見つからない。エルサレムに戻った両親は神殿の境内に入り、そこで学者たちの真ん中に座り、話し合っているイエスを見つけます。学者たちはイエスの賢さに驚きます。両親は学者たちとは違う意味で驚きます。「なぜこんなことをしてくれたのです。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」驚きというより、親をこんなに心配させたことにあきれている、という感じです。

ところが心配している両親に対し、イエスは「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのはあたりまえだということ、知らなかつたのですか。」と応えるのです。両親には、この主イエスの言葉が何を語っているのか、わかりませんでした。こうして3人はナザレへと旅して帰っていくのですが、不思議なエピソードです。梅檀は双葉より芳し、ということであれば、12歳のイエスと学者たちとの話し合い、論議をこそ紹介すべきところですが。しかしその中身については何も触れられておらず、両親とのやり取りだけがそれも短く紹介されています。

いったいこの出来事は何を物語っているのか。ルカはこの貴重な伝承を書き記すことで何を語ろうとしているのでしょうか。

今日の聖書個所で繰り返される言葉があります。それは「捜す」という言葉です。イエスがなくなったことに気づいた両親は捜し回ります。見つからないので、捜しながら、エルサレムに引き返す。そして見つけたイエスに捜していたのですよ、と親としての苦言を呈し、イエスはどうして捜したのですか、と問い返す。捜す、けれど見つからない、捜す、そして見つける、捜すという言葉が繰り返されています。「捜す」という言葉は、このルカによる福音書において、とても大事な言葉の一つです。なくなった一匹の羊を捜す、という時のあの捜すです。見つけ出すまで、捜さないだろうか、と主が言われたあの捜すです。

捜すのは、見えなくなったもの、いなくなったもの、見失われたものを捜すということです。見失われた迷子になった一匹を捜す、のです。迷子になったと両親が思った息子を「捜す」のです。「捜す」ということがとても大事な言葉としてここで繰り返されているのです。

両親はイエスを捜した。どこを探したのかと言えば、親類や知人の間を捜したということです。人と人との間で、イエスを捜したのです。だがそこには主イエスはおられなかつた。捜したけれど見つからなかつた、のです。

そこで両親は、捜しながらエルサレムに引き返し、神殿の境内で主イエスを見つけた。あなたを捜していたのよ、というマリアに対して主イエスは、どうしてわたしを捜し

たのですか、と問い返した。どうして捜したのかと問い返したのは捜さなくていいという意味ではなく、いるところは決まっている、父のもとでしかないのに、なぜそれ以外のところを捜したのか、という意味でしょう。

人と人との間をどれだけ捜しても、救い主はいない。ただ父のもとにだけ、救い主はいるということなのです。

「わたしが自分の父の家にいるのはあたりまえだということ」と訳されている文章ですが、これは直訳すれば、「わたしが自分の父の事柄に携わっているはずだということ」という文章です。神殿、父の家にいるのはあたりまえだ、というふうに場所的なことを言っているよりも、わたしは父のみこころに、父の意志の中で歩んでいるに決まっている、という主イエスの行動・歩みについて語っているのです。

主イエスは人と人との間で見いだされるものではなく、ただ父のみこころにおいて、神の意志の現れるところにおいてこそ、見出されるということです。

確かに救い主イエス・キリストはこの世に来られた。だが、イエス・キリストをわたしたちが見出すのは、人間の願いや人間の思いの中ではない。ただ主は、神のみ心、神の意志を行われるところ、すなわち十字架と復活において、わたしたちは救い主イエス・キリストを見出していく、ということなのです。

ルカ福音書の著者ルカは、主イエスと両親とが経験した過越の祭の折の出来事を、梅檀は双葉より芳し、の出来事として語ろうとはしていない。主イエスが賢い少年であったことはその通りだが、その賢さの中身を語り伝えようとはしていない。

そうではなく、ルカは、これから始まる主イエスの公の生涯、神の独り子としての派遣、使命に生きる歩みの縮図として、主イエスが神の家におられたエピソードを書き記しているのです。

ヨセフとマリアはイエスが迷子になってしまったと思い、イエスを捜そうとした。それ自体親として当然の行為ではあるし、子を思い愛するが故の行動です。マリアは「お父さんも、わたしも心配して捜していたのです」と言った。しかし主イエスはこう答えたのです。「わたしが自分の父の事柄に携わっているのはあたりまえだ」「わたしが父のみこころの中で歩んでいるのはあたりまえだ」人間の親としての絆だけでなく、その良心を前にして、さらに父と呼ぶ存在と向き合っていた主イエスがここにははっきりといます。神を自分の父と呼ぶ、神の子イエスがここにはいます。両親にはイエスの言葉の意味が分からなかったというのですが、マリアもヨセフも、あのクリスマスの出来事を経験したものとして、まったくわからないということではなかったはずで

す。

けれど、神の子としての自覚の中で歩み、神のみ心を自分の意志として歩み歩もうとしている主イエスのことは、わからないことに満ちていた。つまり子どものことを一番よく知る親であるヨセフもマリアも、自分たちの人間的な経験、知恵、考えでは、神の子イエス・キリストのことはわからない、ということです。

イエス・キリストが伝道の歩みを始めるのは、これから十数年後の30歳近くになってからです。それまでの日々、主はナザレで両親に仕え、日々の生活を家族と共に暮らしになった。確かにそれらの日々の後に、主の十字架へと向かう旅は始まるのです。けれども、ルカは、この12歳の少年イエスの出来事の中にも、神のみ心をご自分の意志として歩もうとされる、神の子イエスの意志を読み取っている。つまり主の十字架へと向かう旅は、家族と共にすごした日々においても、始まっていた、ということでしょう。主イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人々に愛された、その全部が、主の十字架への旅に備えをなしていた、と言えるのです。

D a t a : 聖霊降臨節第4主日礼拝式説教

讃美 : 前95、後289

新生教会礼拝堂